令和６年度岡崎市教育研究大会リポート

１４　特別活動

岡崎市立羽根小学校　野村祥太

【研究のテーマ】

自他の考えや思いを大切にし、よりよい集団づくりに主体的に取り組む児童の育成
～「心」と「力」を伸ばすための他者との関わり合い（第6学年）～

１．はじめに

近年、SNS の普及や AI などの情報技術の進化により、他者と直接的に関わることがなくても生活することができるような社会に変化しつつある。このような状況の中、人間関係がうまく築くことができない児童や「やってみたい」という好奇心をもたない児童の増加も問題化している。また、デジタル化などの社会構造の変化もあり、誰もが将来の見通しをもつことが難しく、「先行きが不透明な時代」だといえる。学習指導要領総則にも示されているように、特別活動はキャリア教育の要としての役割を担い、児童たちが変化を恐れず自ら人生を切り開く力を身に付けるために必要不可欠だと考える。

２．研究のねらい

（1）主題設定の理由

本校は令和３年度までプログラミング楽手の研究に力を注いできた。その頃、低学年であった６年生が現在はタブレット端末を有効活用する方法を吟味し、科学委員会が七夕集会で七夕に関するクイズを作成したり、代表委員会や生活委員会が安全に学校生活を送ることができるように室内での過ごし方の啓発ポスターを掲示したりしている。委員会活動は、活動内容が大方決まっているため、児童は自分がやってみたい活動のある委員会を選択していると考えられる。方向性が決まっている活動に対して責任をもち、一生懸命に取り組むことはとても大切なことである。しかし、先程述べたように「先行きが不透明な時代」を生きていかなければならない児童のことを考えると、現在の委員会活動のように「決められた役割を果たす力」だけでは足りないのではないかと考える。

＜科学委員会の発表の様子＞

そこで、本研究では特別活動の中の「学級活動」に焦点を当てた。その理由の１つは、最高学年である６年生は下学年の模範となって部活動や集団行動などに取り組む役割がある。その６年生が自らの学級をよりよくすることができていない状態で、学校や下学年のために働くことは難しいと考えたからである。２つ目は、学級活動であれば児童たちの「こんなことがしたい」という思いや活動案が出されたときに、柔軟に対応することができると考えたからである。児童にとっても、考えたことが実現するという経験はとても興味深く、意欲を掻き立てる要因につながるのではないだろうか。また、児童たちが自分たちの考えや思いを大切にし、それを実現するために行動する力を身につけることができれば、今後の学校生活や将来働く際の自信となるだろう。本研究では特に学級会を題材にして児童の変容を見取る。他者との関わり合いを通して、自他の考えや思いを知ったり伝えたりすることの大切さに気付き、よりよい集団づくりに向けた姿への成長に期待したい。本研究では、第一に学級会が自他の考えや思いを素直に伝える場であることを認識させることから始めた。児童にとって学級会という時間が有意義な時間であると感じさせることができれば、児童が主体となった学級会の企画・運営を行う姿が見られるだろう。教師が学級会の様子を客観的に評価し、称賛できる点と改善できると良い点を伝えることによって、学級会の質を向上させていく。また、必要に応じて適切な教師支援を行うことで、児童が自分の考えをしっかりともったり、他者に伝えたりすることができるだろう。児童が主体となった学級会については、「発言ができる子」「発言ができない子」という立場（役割）が固定されてしまいがちである。そのようなことが起きないよう、教師は学級会の様子を必ず見守る。加えて、岡崎市が提唱する「チーム学習」を各教科の学習等で積極的に取り入れ、他者と関わることへの抵抗を最小限に減らしていくことも同時に行っていく。本研究を通して、「他者のために行動したい」という気持ちや、掲げたことを実現させる力を育て、主体的に学級を変化させていく児童の育成を目指したい。

（2）目指す児童像

本研究で目指す児童像を下のように設定する。

- 自分の考えをもつだけでなく他者の考えを受け入れ、考えや思いを大切にしながら取り組む児童
- 自分たちで決めたり考えたりした目標や活動、集団に向けて主体的に取り組む児童

３．研究の計画

（1）仮説と手だて

①研究仮説

本研究における「自他の考えや思いを大切にし、よりよい集団づくりに主体的に取り組む児童」を育成するため

に、以下で示す２つの研究仮説を立てた。
＜仮説１＞
　個人追究やチームで考えをもったり話し合ったりする場などで意図的に教師支援を行えば、児童は自他の考えや思いを大切にすることができるだろう。
＜仮説２＞
　教師や児童が考えや思い、活動の目的を題材とした学級会を意図的に行えば、自他の考えや思いを大切にし、よりよい集団づくりに主体的に取り組むことができるだろう。

②研究の手だて

　上の２つの仮説に対する手だてとして、以下の４つを考えた。

手だてⅠ：考えや思いの見える化

タブレット端末内にあるアプリケーション「学びポケット」を活用し、座標軸や情報分析シート、クラゲチャートなどの思考ツールに整理することで、考えや思いを分かりやすく表現することができるようにする。また、自分の考えを他者に伝えることが苦手な児童の支援にもつながるであろう。必要に応じて共同閲覧の機能を使用し、関わり合いの質を向上させていく。

手だてⅡ：他者との関わり合いの場の設定

意図的に考えを伝え合う時間を設け、チームや学級で自由に関わり合うことを通して、課題や目標に向けて物事を多角的に考えられるようにする。特定の児童の考えや思いだけで活動が進まないよう、児童が主催の学級会であってもすべてを任せず、意図的に教師が声をかけるようにする。

手だてⅢ：有意義な学級会の開催

行事や普段の学校生活に対して「よりよくしたい」と児童が感じたタイミングで学級会を開催する。児童が主体となった学級会を開催できるようにするため、初めは教師が児童との何気ない会話や行事などから議題を提案し、学級会で議題に提案する視点を児童に伝えていく。児童が学級や学校などのために進んで議題を考え、企画・運営していく姿を目指したい。

手だてⅣ：よりよい集団への軌跡

児童がよりよい集団づくりに向けて主体的に取り組むことができていること、よりよい集団への成長していることを自覚できるよう、学級会の振り返りを行ったり板書の記録（児童の考えや思い）を掲示したりする。

４．研究の実際

（１）年間計画　※１学期については実践済の議題

時数	実施日	主催	学習内容（議題）	目指す児童像への手だて・支援
1学期	4/10	教師	「学級会は、どのような時間なの？」	・昨年度の学級会の様子や実践が分かる資料を提示する。 ・学級会の意義や参加の仕方などを知る。
	4/10	教師	「１年生を楽しませるアイデアを考えよう」	・図画工作科「学校へようこそ」との関連。 ・クラゲチャートを活用して、個人の考えを分かりやすくまとめる。
	4/16	教師	「１学期が終わったときの理想の姿を考えよう」※キャリア教育	・考える視点を明確にするためにクラゲチャートを活用し、目標の姿とその実現に向けた具体的な行動をまとめる。 ・児童が記述したワークシートを廊下に掲示し、互いの目標や成長した姿を知り、認め合うことができるようにする。
	4/18	児童	「協力できる学級を作るためには、どうすればよいだろう」	・必要に応じて、チーム内で話し合う場を設定する。
	4/26	児童	「仲の良い学級を作るためには、どうすればよいだろう」	・必要に応じて、チーム内で話し合う場を設定する。
	5/7	児童	「大玉送りで勝つためには、どうすればよいだろう」（高学年）	・学級会後、進め方や話し合う姿について称賛する。 ・学級会後、話し合いの板書記録を掲示する。
	5/14	児童 教師	「運動会の成功に向けて、自分たちにできることはないだろうか」 ※「木下先生をよい意味で裏切ろうプロジェクト」（教師考案）	・考える視点を明確にするため、板書する際はＰＭＩシートを活用する。 ・演技の完成度が高まっていることを称賛し、次の目標をもたせるために教師から学級会の提案をする。
	5/16	児童	「リレーで勝つためには、どうすればよいだろう」	・必要に応じて、チーム内で話し合う場を設定する。
	5/18	教師	「目標の姿に近づくために、今の自分を見つめよう」※キャリア教育 「お互いの素晴らしい姿を見つけ、称賛し合おう」	・考える視点を明確にするために情報分析シートを活用し、現状の姿と改善策をまとめる。 ・手際よく活動に取り組むことができるよう、付箋を使う。
	5/23	児童	「１年生との合同レクリエーションを考えよう」	・必要に応じて、チーム内で話し合う場と視点を設定する。 （１年生の立場と６年生の立場、双方向から楽しむことができる内容であるかという視点をあたえる。）
	6/4	児童	「よりよい学級にするために、今の学級について考えよう」	・考える視点を明確にするため、特活ノートや板書にまとめる際はＰＭＩシートを活用する。
	6/6	児童	「１年生との合同レクを成功させるために心掛けることを考えよう」	・必要に応じて、チーム内で話し合う場と視点を設定する。 （楽しむことができる、かつ安全に遊ぶことができるかという視点をあたえる。）
	6/14	児童	「１年生との合同レクの良かった点と改善点を考えよう」	・考える視点を明確にするため、特活ノートや板書にまとめる際はＰＭＩシートを活用することを児童にすすめる。
	6/20	児童	「学級代表のよい点と改善を求める点を教えてください」	・具体的な考えや思いが出せるよう、これまでの行事に向けた学級代表の働

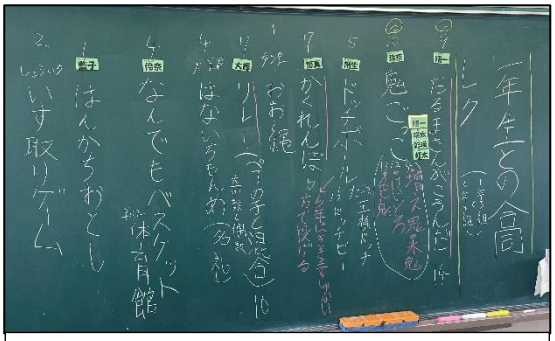
				きや授業の様子を提示する。
	7/18	教師	「自分で掲げた目標の姿に成長できたか振り返ろう」※キャリア教育 ※2学期実施予定	・座標軸を活用して、数値で個人内評価を行う。 ・2学期に向けた目標の姿とその実現のための行動を情報分析シートを活用して整理する。
2学期		教師	「2学期が終わったときの理想の姿を考えよう」※キャリア教育	・考える視点を明確にするためにクラゲチャートを活用し、目標の姿とその実現に向けた具体的な行動をまとめる。 ・児童が記述したワークシートを廊下に掲示し、互いの目標や成長した姿を知り、認め合うことができるようにする。
		児童	「学習発表会の成功に向けて、自分たちにできることはないだろうか」	・考える視点を明確にするため、PMIシートを活用する。
		教師	「よりよい学級にするために、『今』の学級を見つめよう」	・考える視点を明確にするため、特活ノートや板書にまとめる際はPMIシートを活用する。
		児童	「修学旅行の成功に向けて、自分たちにできることはないだろうか」	・考える視点を明確にするため、PMIシートを活用する。
		教師	「自分で掲げた目標の姿に成長できたか振り返ろう」※キャリア教育	・座標軸を活用して、数値で個人内評価を行う。 ・3学期に向けた目標の姿とその実現のための行動を情報分析シートを活用して整理する。
3学期		教師	「卒業を迎えるときの理想の姿を考えよう」※キャリア教育	・考える視点を明確にするためにクラゲチャートを活用し、目標の姿とその実現に向けた具体的な行動をまとめる。 ・児童がこれまでに記述したワークシートを廊下に掲示し、成長を実感できるようにする。
		児童	「卒業式で成長した姿を示すために、自分ができることを考えよう」	・考える視点を明確にするため、クラゲチャートを活用する。
		教師	「3学期の自分を振り返り、中学校への目標を立てよう」※キャリア教育	・座標軸を活用して、数値で個人内評価を行う。 ・中学校に向けた目標の姿とその実現のための行動を情報分析シートを活用して整理する。

（2）実践内容

「1年生との合同レクリエーションを考えよう」

図画工作科「学校へようこそ」では、新しく入学してきた1年生が楽しく学校生活を送ることができるように、学校内スタンプラリーやペットボトルボウリング大会、顔はめパネルなどを企画・運営した。1年生を喜ばせたいという強い思いが、児童の粘り強い活動へと導いていたと考えられる。

本校では、6年生が1年生の朝の支度のお手伝いなどを行う工夫をしており、1年生との関わる機会が多い。6年生や1年生の一部から「合同でレクリエーションがしたい」という声が上がり、学級会の開催が決まった。児童が主体となった学級会はこれまでに数回行っていたため、学級代表が中心となって、個人で考える時間→チームで共有する時間→全体発表する時間の流れで進めることができていた。チームでの話し合いを聞いていると、1年生が楽しむことができるような遊びを考えている児童と6年生も楽しくむことができる遊びを考えている児童がいるように感じた。レクの目的を考える時間を設けると、「1年生との仲を深めるため」という答えが多く出た。「1年生との仲を深めるためにはどうすればよいんだろう」と切り返し発問を続けていき、「1年生が楽しむことはもちろん、自分たちも全力で楽しむことが大切だ」という答えに辿り着いた。教師が、適切なタイミングで考える視点をあたえることは、さまざまな視点から考えることの大切さに気付くきっかけになると感じた。

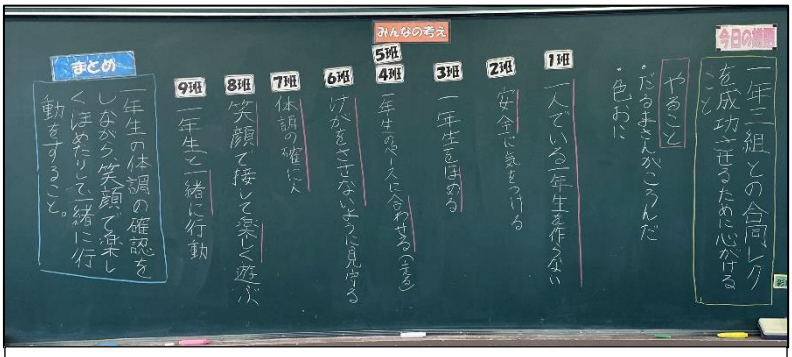


【資料1】内容を考えた際の板書記録

「1年生との合同レクを成功させるために心掛けることを考えよう」

合同レクの前日、学級代表から学級会を開催したいので学活の時間を1時間確保してほしいとの要望があった。内容を尋ねると、合同レクを成功させるために気をつけることを話し合いたいと答えた。「1年生のために成功させたい」という気持ちと、「1年生に楽しんでもらいたい」という他者意識が芽生えていることを感じた。学級会が始まると、「成功させるために心掛けること」という言葉をどのように理解してよいか分かっていない児童が少数いることに気付いたため、考える視点を明確にしようと提案した。何のために心掛けるのかを問うと、「楽しむことができるように」と「安全に遊ぶことができるように」の2つの考えが返ってきたため、考える視点をその2つに絞ることにした。

教師から提案したり児童と考えて決めたりして、考える視点や話し合う視点を明確にすることによって、自分の考えをもつことができる児童の姿が見られた。この合同レクを成功させた児童の表情からは、達成感や充実感を得ているように感じた。

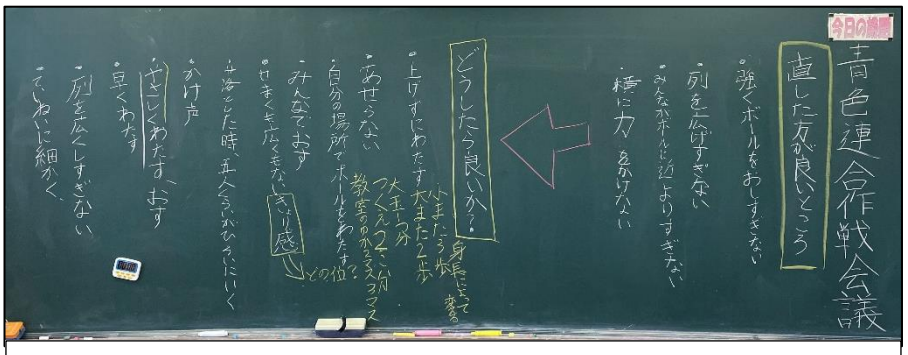


【資料2】他者意識をもった児童が合同レク前日に開催した学級会

「大玉送りで勝つためには、どうすればよいだろう」

今年度の運動会には「全校大玉送り」という競技があり、児童にとっては初めての競技となる。一度目の練習を終えた児童を集め、練習の振り返りをしてみると、「作戦会議を５年生と一緒にしたい」という声が上がった。５年生を誘う理由を尋ねると、「ダンスも５年生と一緒に練習しているし、意見や考えを出してくれそうだから」と答えた。縦割りのリーダーと学級代表を中心に学級会を開催した。練習を終えた児童に対して、すぐに感想を聞いたりどうしたいか考えさせたりしたことによって、学級会を開催したいという児童の思いにつながったと考えられる。今回５年生を巻き込むことを児童が選択したが、児童の発言から出されなかった場合は、全校が参加する競技で勝つためにはどうしたらよいか問いかけるなど、下学年を巻き込み、多くの児童で話し合ったり協力したりして行事に取り組むよさに気付くように支援する。作戦会議を終えた児童は、同じチームのすべての学級に作戦や掛け声を伝えに行こうと主体的に考え、行動に移すことができた。本番は勝つことはできなかったが、行事に向かってこうが生年が協力し、一生懸命に取り組むことができたと実感したことで、充実した表情を浮かべていた。

【資料3】5･6年合同学級会を開催した時の様子

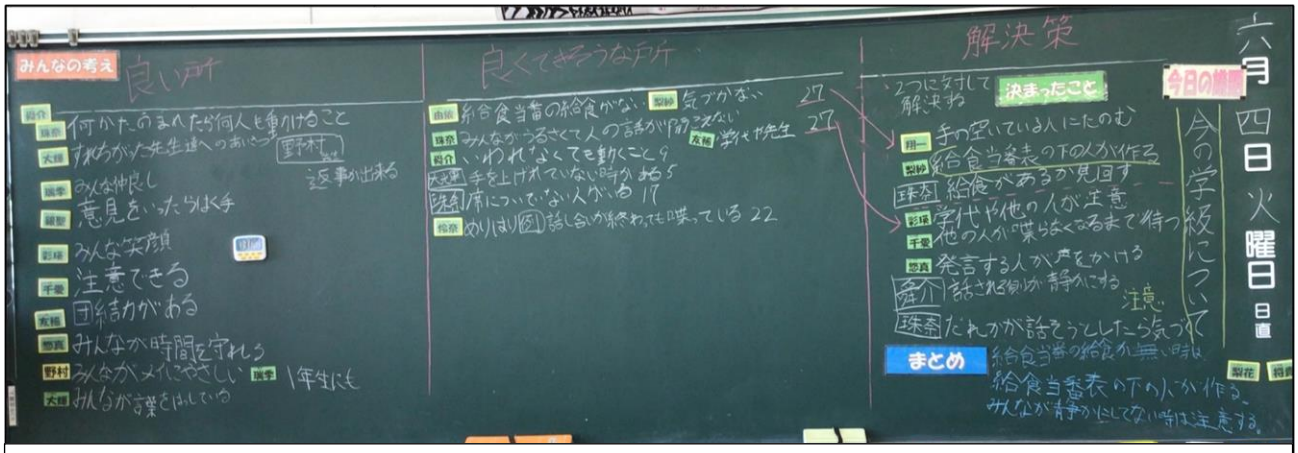


【資料4】5･6年合同学級会で出された改善点と解決策の記録

「よりよい学級にするために、今の学級について考えよう」

運動会という大きな行事が終わってからの約１週間は、児童たちは運動会の余韻に浸り、休み時間に踊ったり歌ったりしている児童がいた。男女が分け隔てなく、運動会当日の写真を見ながら思い出を振り返る姿が至る所で見られた。しかし、そのような現象が落ち着いた頃、多少の学級の乱れ（授業での集中力の低下やルールの緩みなど）が見られたため、学級代表と議題の相談をし、学級会の開催に至った。学級代表も教師と同じように学級の乱れを感じていた。だが、注意をしようとしても対象が複数人であったため、なかなか注意の声掛けができなかった。

今回の学級会の司会は学級代表に担当してもらい、教師は児童役として参加した。児童役として参加した理由は２つある。１つ目は児童役として参加し、司会の児童に対して意見や質問のしかたの模範を示すためである。これまでの学級会からさらに質を高めたいと考えたためである。質を高めるとは、他者の意見や考えに対して賛成するだけではなく、反対意見や質問をして話し合いを深めることだと考えている。２つ目は、チームで話し合いをする際に、意見や考えを伝えるだけで終わってしまうチームに加わり、級友の話の聞き方や話し合いの回し方の模範を児童の立場として示すためである。また、他者の発表に対してリアクションをとったり、質問をしたりする聞き方を児童に伝えることを通して、児童が互いの意見や考えを大切にすることができると考える。こうした聞き方が当たり前にできるようになると、全体発表の質が高くなる。実際、この日の学級会は今までの学級会を比較しても、全体発表の数、チーム内の話し合いの質が断然良くなっていた。児童役として模範を示すことの大切さを実感する

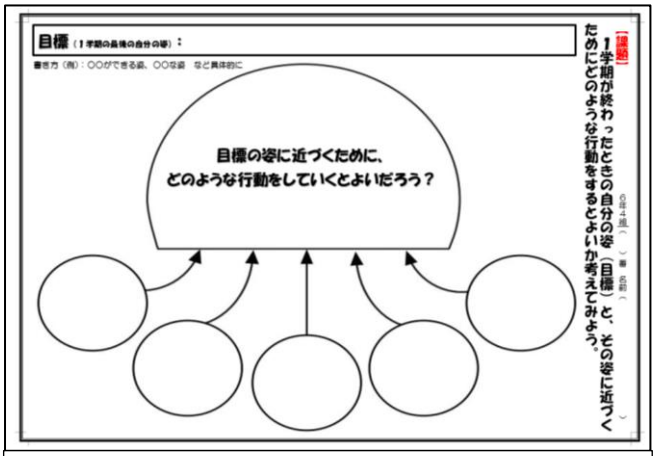


【資料5】『今の学級』について考える学級会で出されたよいところ、よくできそうなところ、解決策の記録

ことができたとの同時に、本学級の児童の特徴やよさを活かすことが重要だと感じた。

「１学期が終わったときの理想の姿を考えよう」

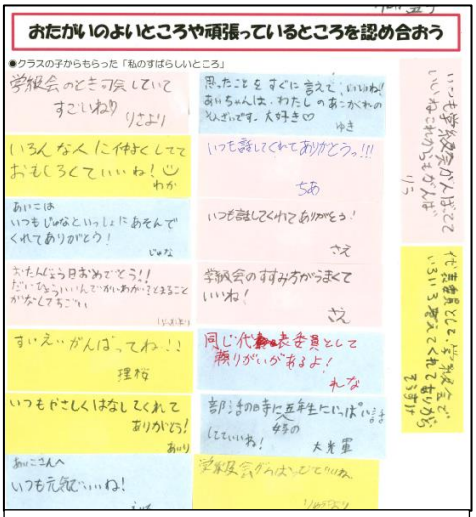
主題設定でも述べたように、今の時代を生きる児童に求められていることは与えられた役割を果たす力だけではなく、自分で考え実現させる行動力である。そのため、キャリア教育は必要不可欠である。各教科の学習の中でも、将来どのような場面で学習したことが活用できるかを考え、キャリア教育につなげていくことも大事なことだと考えている。大谷翔平が高校生の時から目標達成シート（マンダラチャート）を活用して自分で将来の目標を決定し、その姿の実現に向けて何をすべきか考えていたように、自分を成長させようとする心とそれを実現させる行動力を小学生のうちから身につけさせたいと考えた。



【資料6】思考ツール「クラゲチャート」を活用した目標の設定

学級の目標の姿、大切にしたいこととして「級訓」というものを４月初めに設定している。授業中や行事の練習中などにはその級訓の言葉を想起させ、児童を鼓舞している。本学級の級訓は『新しい自分へ』であるため、児童たちは今まではできなかった自分、取り組むことから逃げてきた自分を変えようと身の丈以上に取り組んでくれている。学級の目標はあくまで目指す学級像であるため、一人一人がどのように成長しているのかを見取ることは難しいと考える。そう言った意味でも、一人一人に目標とする姿を考える必要があるのではないだろうか。

児童に資料のようなワークシートを配布したが、初めての取り組みであるため、どのようなことを目標にするとよいのか分からず困っている児童が多かった。そのとき、大谷翔平の目標達成シートを提示することや教師側が模範で示すことなど、さまざまな支援が頭に浮かんだが、児童が手が進まない理由には現状の自分のよさを理解することができていないのではないかと考えた。そのため、一度活動を中断し、互いのよい姿を認め合う活動の実施を理由とともに児童に提案した。



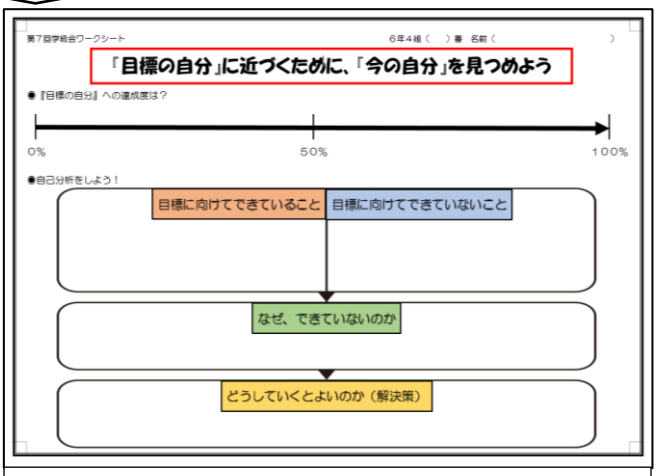
【資料7】付箋を活用した認め合い活動

児童からは「その方がこのワークシートが書けそうな気がします」との声が多く挙がった。児童の意見や気持ちに沿ったタイミングでの活動の実施にすることができたため、意欲的に活動に取り組むことができていた。運動会などの行事や普段の学校生活での互いの姿を認め合うことを通して、自分のよさを理解することにつなげることができた。一方で、他者のよい姿が自分にはないことも自覚することができ、「〇〇さんのように、□□ができるようになりたい」などと目標の姿を設定する児童もいた。このような活動を実施する時に留意したいところが付箋をもらえる児童に差が出ることである。そのための支援として机間巡視の中で、「付箋を多くもらえることそうではない子が出るのは、どうなのかな」「多くの子に書くことができるのもよいところだよね」などと声をかけた。適切なタイミングで教師を取り入れ、児童同士の関わりの場を設定したことによって、自分の目標の姿を考えることにつなげることができた。

「目標の姿に近づくために、今の自分を見つめよう」

目標を設定した際は、評価・改善の場を設けることが大切である。初めに設定した目標の姿のワークシートは常に廊下に掲示し、互いにその姿に近づくことができているか確認することができるように工夫した。休み時間や朝の時間に見て、会話の話題にしている児童がいた。また、廊下に掲示したことによって本学級以外にも影響を受けている児童もいた。

自分の目標とする姿であるため、まずは自己評価をすべきだと考え、情報分析シートや座標軸を活用して目標を競ってしてから数か月間の自分の生活を振り返る時間を設けた。意識して生活ができた児童とそうではない児童に大きく分かれたが、この活動の大切なことは自分と向き合い、自分の将来のために目標を達成しようと考えることである。そのねらいを児童にもわかりやすく説明した。自己評価の後、同じチーム内で自己評価について発表する時間を設け、成長できている部分とも



【資料8】「情報分析シート」や「座標軸」を活用した自己評価

う少し意識して過ごすべき部分を認め合った。

5．研究のまとめ

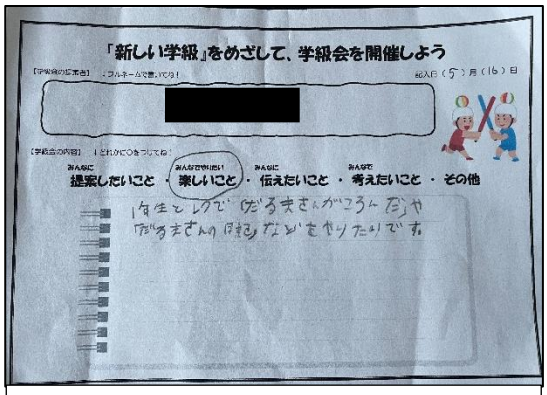
①仮説１（個人追究やチームで考えをもったり話し合ったりする場などで意図的に教師支援を行えば、児童は自他の考えや思いを大切にすることができるだろう）について

本学級には、進んで自分の意見を考えたり伝えたりすることができる児童が多いが、うまく伝えることができなかったり他者の意見に従うだけになったりしてしまう児童もいる。思考ツール「クラゲチャート」を活用して、入学してきた１年生が学校生活を楽しんでもらえるようなアイデアを考えたり自分の目標とする姿を考えたりした結果、思考ツールを使わずにノートに考えを書かせる場合と比べ、はるかに自分の意見や考えを書くことができていた。また、自分の言葉で説明することが難しい児童であっても、共同閲覧の機能を活用したことによって、他者に思考が視覚的に理解してもらえた。ほかの思考ツールの活用についても、普段は自分の思いを伝えることが苦手な児童が他者に伝えるための後押しとなっていたように感じている。しかし、児童同士が互いの考えや思いを大切にすることが当たり前のようになるためには、普段の授業から児童の考えを丁寧に受け入れる姿を教師が模範として示していくことが大切である。

授業の中で意図的に関わり合いの場を設けて、多くの意見や考えをもとに学級としての意見を考えていくことを児童に常々伝えていくことや、他者の考えや思いを受け入れて自分の考えを述べることができている児童を称賛することが、「みんなの考えや思いを聞こう」という気持ちをもって学級会などに臨む姿につながったと考えられる。また、先程のことを踏まえつつ、活発に話し合いが進んだ際に児童たちを分かりやすく称賛することも、目標とする学級会の在り方を児童が理解することにつながったであろう。

②仮説２（教師や児童が考えや思い、活動の目的を題材とした学級会を意図的に行えば、自他の考えや思いを大切にし、よりよい集団づくりに主体的に取り組むことができるだろう）について

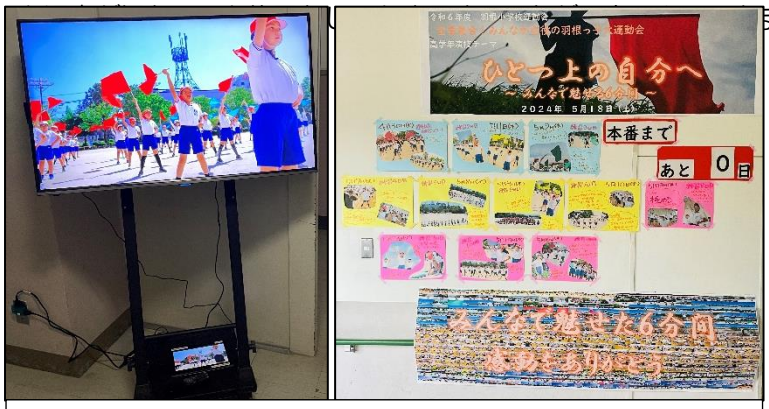
児童の様子を最も間近で見ている教師が、ルールが守れていない状況や学級の男女間の違和感などに気付きやすい。その状況について朝の会で話をするだけではなく、あえて「学級会」として話し合いの場を作ることによって自分たち事として捉えさせることができた。また、そのような教師の姿を見て、資料にあるように児童自ら議題を提案するようになったり、議題を考えながら生活するようになったりする。児童の気持ちや学級の状況に沿った話し合いの場の設定は、話し合いへの意欲的な参加へとつながったため有効といえるだろう。また、行事の成功への話し合いの場では、自分たちの評価だけでは「満足している」という意見が多く出てしまうため、運動会であれば「観客のために」「指揮台に立つ先生のために」と考える視点を与えた。その結果、休み時間に練習の場を作りたいと考えたり、他学年の演技を見て激励のメッセージをおくりたいと考えたりするなど、主体的に取り組む姿につながった。



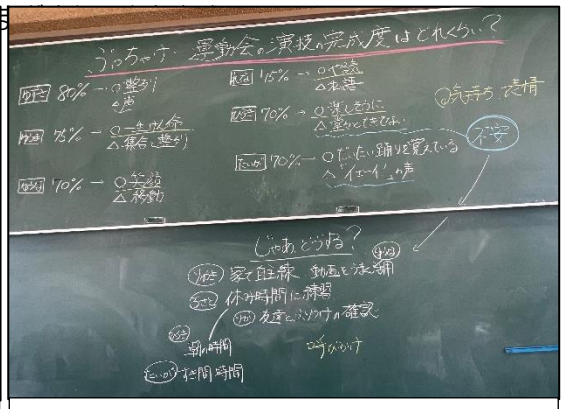
【資料9】だれでも学級会の開催ができる提案文書

6．おわりに

本研究では思考ツールや掲示物の作成など、さまざまな工夫を実践したが、それらの工夫に児童が目を向けるように声かけをしていくことも必要である。一人一人の気持ちに合わせて支援をしていくことは必要であるが、大変難しい。そのため、教師が学級全体に向けて講じている工夫をいかに個へ届けるかがポイントである。下の資料にあるように、運動会の練習風景で動画を作成して流したり高学年掲示板として児童の写真と思いを掲載したりするなど、外発的に学級会開催への意欲を掻き立てるための工夫を考えていくことも大事なことである。しかし、近年は働き方改革として長時間勤務についても問題視されている。時間を多く割かず、かつ児童へのアプローチは深くしていかなければならない。また、行事の減少や簡素化への対応も含めると、本研究は満足できていない。今後



【資料10】行事へ取り組む姿勢や気持ちを維持・向上させる工夫



【資料11】行事の成功への意図的な代表議会の実施